

平成 25 年 3 月 2 日

山元町指定有形文化財 茶室、旧蓑首城門、板倉について

山形大学地域教育文化学部
教授 永井 康雄

■茶室

東西 3 間半、南北 4 間の規模で、木造平屋建ての建物である。屋根は主要部が金属板葺、下屋は杉皮葺である。平面は、一間半の床と一間の床脇を備えた十畳、床と書院を備えた四畳半、踏込床を設けた三畳台目、縁及び水屋から構成される。

建築年代は不明であるが、様々な言い伝えが残されている。仙台藩祖伊達政宗が豊臣秀吉から拝領したものという。天保 3(1832)年に 12 代藩主伊達斉邦から大條家 15 代道直が入料付きで拝領して仙台城二の丸(本丸とも)から仙台川内の大條邸に移建、明治 21(1888)年に仙台支倉通りに、昭和 7(1932)年に現在地に移されたという。

建築及び資料面での本格的な調査を実施しなければ詳細は不明であるが、建物南側の四畳半及び三畳台目部分と建物北側の十畳の部分とでは若干建築年代が異なるように見受けられる。伝承でも数度の移築がなされたようであるので、その間に様々な改造や増築がなされたと推察される。部材の一部などに伝承に関連するものがあるかもしれないが、全体的に桃山時代の建物と見ることは難しい。

近世において茶の湯は社交に欠くことのできないものであった。仙台藩においても藩祖政宗は古田織部や小堀遠州に繋がる茶人である清水道閑を京都より招き、仙台藩の茶道を確立させた。続く清水動閑は石州流を皆伝され、この系統は幕末まで代々仙台藩の茶道頭を勤めた。仙台藩の歴代藩主は茶の湯に造詣が深く、藩主参勤の折には茶道頭も江戸に随行したという。

仙台藩の茶の湯文化の流れを伝える建物としては、残月亭(明治中期建築、仙台市指定文化財)が知られるが、江戸期まで遡る建物の存在は知られていない。本建物の現状は、老朽化に加え東日本大震災による被害が著しいが、随所に意匠を凝らした建物であることは容易に理解できる。仙台藩の奉行職をも勤めた大條家の茶室として、上述のような仙台藩における茶の湯の文化・歴史の中で文化財的価値を考えるべきものであり、書院風茶室の数少ない遺構として貴重である。

■旧蓑首城大手門

桁行約 5.0 メートル(柱間正面 3 間、背面 1 間)、梁間約 2.4 メートル(柱間 2 間)の規模で、木造平屋建ての建物である。屋根は切妻造の茅葺であるが、金属板で屋根全面を覆っている。正面通り中央間に設置されていた門扉は失われている。

建築年代は不明であるが、貞享4(1687)年に大條監物宗快が藩に提出した普請願の絵図に描かれる葦首城大手門と建築形式、位置が同じであることが指摘されている。仙台藩では地方知行制をとっており、家臣は支給された領地の経営拠点として要害、所、在所を拝領した。葦首城は坂元要害と呼ばれたもので、一国一城令以降も土塁、空堀、水堀を廻らした曲輪を配するなど実質的には城郭として存続した。本建物の建築形式は、熊谷家表門(室町後期、伝葛西氏居城登米城搦手門、登米市指定文化財)、香林寺山門(安土桃山、旧月の輪館東門、宮城県指定文化財)、円鏡寺山門(伝岩ヶ崎城門、元和2(1616)年、栗原市指定文化財)、荘厳寺山門(江戸前期、伝原田甲斐屋敷門、仙台市指定文化財)などと類似しており、城門或いは武家住宅の門の特徴を有している。さらに周辺には坂元要害の土塁や水堀跡が残されており、これらと一体となって藩政時代の要害の様子を良好に伝える貴重な遺構である。

■板倉

桁行約4.6メートル、梁間約3.7メートルの規模で、木造二階建ての建物である。屋根は切妻造の金属板葺である。

大條家ゆかりの建物であり、戊辰戦争時に武器庫として使用されたとの伝承があるものの建築年代は不明である。また、建物が建つ場所は大手門を入った登城口にあたるので戊辰戦争時に現在地にあったかという点も疑問が残る。或いは何れかの曲輪から建物を移築したのであろうか。これらの解明のために、今後の調査・研究が俟たれる。

板倉は仙台藩内でも数多く見ることができるが、近年では老朽化のため、或いは震災被害により取り壊される例が後を絶たない。本建物も老朽化が著しいが、茶室、庭園、旧大手門などと同様に当地域の歴史的景観を構成する要素の一つとして貴重である。